

「・・・と、まあこんなわけでして」

室長室の机の前に立つたボツシユがそんな言葉で話を締めくくった。

「ふむ・・・」

リーバルが眉根をひそめて腕を組む。机の上に乗っている大皿は、先程まで山盛りに積んであったチョコチップ鳩饅頭の跡形もなく、空っぽになっていた。

リーバルの横ではパーシスが両の拳を握りしめ、ふるふる震えている。

「貴様は・・・」

声までも震わせて、パーシスが地獄の底から這い上がってきた魔物のような声で何かを言うとしていた。

「えーっと、なんででしょう?」

ボツシユはそんなパーシスの怒りなど、どこ吹く風とはかりに間延びとした声で返事をする。

「なんででしょうじゃねえっ!」

「へ?」

「貴様は国の管理にあるべき遺跡の宝物を持ち出した挙げ句に、それを奪われたんだぞ!」

「あー・・・はい・・・」

ボツシユがさすがに気まずそうな顔をして、頭をぼりぼりと掻いた。

「それなのになぜそんなにのんびりとしている?」

「いや、室長、最初に大変だと大騒ぎしてたじゃないですか」

そう言われてみればそうだった。ボツシユはパーシスが開いた扉に激突し、流血までしている。それが慌てふためいてパーシスの所へ報告をしに来た結果だということは、パーシスにも

否定しようがなかった。

「室長、落ち着け」

「・・・はい」

横から口を挟んだリーバルに、パーシスは何かを言おうとして口を開きかけたが、思い直して大人しくリーバルの助言に従った。確かにこの場でボツシユをつるし上げたところで事件が解決するわけでもない。

「いくつか確認したいことがあるんだが・・・いいか?」

改めてリーバルがボツシユに向き直る。

「はい」

ボツシユもリーバルの真剣そうな顔を見ると、居住まいを正した。

「お前はいつも妹を覗いているのか?」

「もちろんです」

ガンツ

パーシスは室長席の椅子から滑り落ち、後頭部を安楽椅子の背もたれに強打させた。

「・・・なんとという羨ましい・・・」

リーバルが右の拳を握りしめながら首を横に振る。

「では、彼女のバストサイズを再度」

「86のD」

「よろしいっ!」

「アンタら真面目にやる気あるんか!」

パーシスは後頭部の鈍痛をこらえながら立ち上がり、叫んだ。

「こちらまで真面目に事情を聞いている」

至極真面目な顔をしながらリーバルがきつぱりと言い放った。

「じゃあ、聞きますけどね？ ダーク・リフレクション が盗まれた事件解決に、どうしてボツシユの妹覗き趣味の事実だとか、妹のバストサイズだとかを聞いたたださなきやいかなのですかっ！」

パーシスは室長室の机面を両手でパンパンと叩きながら大声を張り上げる。

「貴様、そんなことも分からんのか？」

リーバルが哀れむような表情でパーシスを鼻で笑う。

「そもそも、このボツシユの話は今回の ドツペル・ゲンさん 盗難事件において重要な証言だと思われる。むしろ現在のところ、彼の証言以外に有益な情報は皆無であるに等しい」

「はあ……」

パーシスは話を進めるためにはこの話を聞き、うなずくしかないのだということ悟った。

「しかしながら、彼の情報が必ずしも正しいとは限らない。そこでまず、この話が本当かどうかを確かめるために、念押しのために、彼が彼の妹を覗く趣味があるのかどうなのかを確認する必要性があったということだ」

「言っている内容が内容だけに信憑性の欠片もありません」

パーシスがリーバルの耳に入るか入らないかという声でぼそりとつぶやいた。

「本来であれば、妹を覗くという趣味を語る必要性があるわけでもないのに、このボツシユはそれを敢えて我々に打ち明けてくれた。まずここでこの話の信憑性が高まっている。これが第一のポイントだ」

「当然ですとも。隠すことなどどこにもありません。私は妹を愛していますし、妹も私を愛してくれていますから」

ボツシユが胸を張って堂々と、しかも誇らしげに答えた。

「そういう問題じゃないだろう……」

パーシスは頭を抱えるしかない。

「次に、オレは彼の話が本当かどうか確認するために、彼の妹のバストサイズを聞いた。これは、先ほど聞いたバストサイズと差違がないかを確認するためだ」

「アンタの趣味じゃないんか……」

「ふん……決してそれだけではないのだよ」

今度のつぶやきはリーバルの耳にも届いたらしい。

「なにげに自分の趣味だつてことを認めてるじゃないか」

「オレは女性のスリーサイズを言い当てるのが趣味なのだが、中でもバストサイズの目測精度ではこのソルパークス、いや、ラムシユタインでも右に出る者はいないと自負している」

「威張るな。威張るな」

「従って、ここでバストサイズを確認しておく事により、彼の妹に会った際に彼の話が本当かどうかを知ることができるというわけだ」

「誰だ……こんなヤツを騎士団の師団長に推挙したヤツは……」

室長席でひたすら頭を抱えているパーシスを尻目に、ボツシユはリーバルの特技に感銘を受けたりしい。

「今度は非その目測方法を教えてください」「よからう。だが修行は厳しいぞ」「その技を身につけるまで耐えてみせます」などと勝手に盛り上がっている。

「それで、確認の後はどうするんですか？」

いい加減呆れて疲れ果てそうになってはいるものの、宝物管理室の室長としてここでくじけるわけにはいかない。パーシスは自分を奮い立たせながらも果敢に話を先に進めようとする。

「うむ。現時点でやるべき事はやった。どうやらボツシュが言っていることに矛盾はないようだ。彼の言うことが事実であることを前提として話を進めるぞ」  
「どうやらリーバルにも話を進めようという気はあるらしい。」

「わっかかりましたー！師団長っ！」

ボツシュもその気になってリーバルに敬礼なんかしていたりする。

「まず、一番肝心なところだ」

リーバルもすっかりボツシュに乗せられたのか、もったいぶったように咳払いをする。

「ドッペル・ゲンさん を奪った犯人像をしつかりと把握しておく必要性がある」

リーバルが言い出した意見は至極もつともな話ではあったが、散々紆余曲折してようやくここに至ってこのまともな意見。初めっからこの意見が出ていればと思うと疲れること夥しい。

「そこで改めて、先ほどの回想シーンで出て来た男の特徴を確認する」

「ええっと・・・外套は灰色。黒い頭巾を目深に被っていたので、詳しい顔は分からないらしいです。」

「背格好はどうだったのかね？」

ようやく本題に入った安堵の息を吐きながら、パーシスも詳細な情報を得るために口を挟む。

「背格好は高くもなく、低くもなく、さすがに具体的な数字までは出てきませんでした、横に立っていた時に妹の目線がちょうど男の肩口あたりだったそうです」

ボツシュの妹はとっさの出来事にはよく覚えているといえた。ボツシュにしても間が抜けていて世間一般からズレたところがあるというものの、観察力や注意力は突出しているといえた。おそらく妹も聡明な女性なのだろう。

「妹の身長は？」

「158センチです」

これもまた即答でボツシュの口から返事が返ってくる。

「身長まで完璧に覚えているのか」

パーシスも最早呆れを通り越して感心するしかないようだった。

「データとして不足しているとしたら、体重だけではないかと」

「貴様ほどの男でも女性の体重は計り知れんというわけか」

リーバルが驚いたように目を見開く。

「スリーサイズは教えるというのに、体重を教えないという女性の理屈は謎に満ちています」

「ある程度まで行った女性の年齢もそうだといいことを覚えておいた方がいい」

リーバルがボツシュの謎に同意しながらも助言を与える。誠に心温まる師弟愛が育ちつつあるようだった。どういふ師弟関係なのかを除けば。

「男の体重はどうだったのだ？」

「さすがに外套を身に纏った状態では体型も分からないと言われました」

「それもそうか・・・」

「ただ・・・」

「ただ？」

「外套を着た背中とは異様に盛り上がっていて不気味だったということと、鏡を手取る瞬間に外套から覗いた左腕がよくわからないものだったとか・・・」

「よくわからないもの？」

「あ、いや、これは見間違いかもしれないと言っていました、黒い剛毛に覆われた角のような腕だったとか」

「なるほど」

リーバルは立ち上がると天井に向かって声をかけた。

「おい、おめえら、聞こえてるな？これはアタリだ。ボツシュの妹んところについて詳細を

まとめてこい。それとオレも今から幕舎に戻る。至急副長と参謀を呼んでくれ」

「師団長？」

ボツシユが怪訝そうな顔で尋ねる。

「オバス広場のあの事件だ。部下にお前の妹のところに行くよう指示しただけだ。心配ない。ついでに護衛も数名残しておこう」

リーバルはそう言い残して足早に室長室を後にしていった。

「で、ウチらはどうしましょう？」

間の抜けた顔で戸惑っているボツシユにパーシスは冷たく言い放った。

「お前も自力で、ダーク・リフレクションを奪回してこい」

「ええっ？」

反論の余地を与えず畳みかける。

「奪回できなかつたらお前、クビね」

パーシスも自分達組織の力で今回の不始末をつける必要があった。早急に方法を検討しなければならぬ。

パーシスは椅子から立ち上がると緊急会議を招集すべく室長室を後にした。

残されたボツシユは真っ白な灰になって、ひとり残された室長室で立ち竦んでいた。